

Title	無垢なる器からの脱皮 : The Tombs of Atuan 試論
Author(s)	松本, 祐子
Citation	聖学院大学論叢, 11(4): 133-143
URL	
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

無垢なる器からの脱皮： *The Tombs of Atuan* 試論

松本祐子

No More an Innocent Vessel: A Reading of *The Tombs of Atuan*

Yūko MATSUMOTO

Ursula Le Guin's *The Tombs of Atuan* is full of sexual imagery. The half-ring hidden in Tenar's dark underground world like an enormous womb is connected with the other half brought from the outside by Ged, which suggests fertilization. The romance between Ged and Tenar, however, does not follow as expected. Since *The Tombs of Atuan* is one volume of the series whose hero is Ged, Tenar, as a minor character, seems to be left alone and driven away from the stage at the end of the story so that Ged may continue his heroic adventure. It is never the weakness of women, however, that Le Guin lays emphasis on. The extraordinary power which fills the underground world of "Nameless Ones" symbolizes the unlimited energy of the nameless women oppressed for generations.

Tenar, who combines directly opposed images of "a captured lady" and "the monster Minotaur", has acquired authority by accepting the conventional system, but her way of life is thoroughly passive. Tenar, as Arha, "the Eaten One", is robbed of her true name and personality and forced to be ignorant in exchange for false authority; then her oppressed curiosity is released by Ged and, with this as a trigger, Arha's identity collapses and that of Tenar's is restored instead. Tenar is charmed with Ged's magic power which is obtained by knowing the true nature of things, but in *Tehanu*, the last volume of "The Earthsea Quartet", the fact is shown that the magi's power obtained by neglecting their own sex is not the one Tenar should aim for. Le Guin attempts to give a new definition of power, describing an ordinary woman who struggles to be a perfect woman and have power and responsibility at the same time.

The Tombs of Atuan is the story of beginning in which Tenar begins to walk in order to get

Key words: Ursula Le Guin, Feminism, Fantasy

power as a woman by leaving another self who was the innocent and ignorant “vessel of evil”.

Ursula Le Guin の *The Tombs of Atuan* (1971) は、1990年発表の *Tehanu* を加え、*The Earthsea Quartet* として完成したシリーズの第二巻に当たる作品である。全シリーズを通しての主人公はもちろんゲドだが、*The Tombs of Atuan* の真の主役は、前三作から二十年近い歳月を経て、再び *Tehanu* で読者の前に姿を現すことになるテナーである。最終巻の *Tehanu* によって、Le Guin は、勇者の物語の伝統に則って自ら創造した「男性的」な *Earthsea* の物語を女の視点から「改訂」したのだと語っているが⁽¹⁾、*Tehanu* が書かれたことで、*The Tombs of Atuan* は、そこから新たな意味付けを照射される形で、より明確なメッセージを帯び始めたと言っていいのではないだろうか。*The Tombs of Atuan* に用意された答えとも言うべき *Tehanu* を視野に入れつつ、もう一度、女の物語として、*The Tombs of Atuan* を読み直してみたい。

The Tombs of Atuan は子供の本でありながら、濃厚な性的メタファーに満ちている。名無き者たちの墓標として、地上から突き出す九本の石柱は男性のシンボルを思わせ、地下に広がる大迷宮を備えた墓所 tombs は、言うまでもなく、子宮 womb をイメージさせるものである。アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』によれば、墓は「死体を容れるすべてのものと同じく、女性、母性を表す。／変容を表す。また再生を願って、もとの状態へ退行することを表す（墓 tomb は子宮 womb と関連する）」⁽²⁾ものとされている。アチュアン⁽³⁾の墓所は男子禁制の聖域であり、そこに住むのは巫女と去勢によって男性性を奪われた宦官 eunuch のみ。儀式によって〈喰らわれし者〉The Eaten One、すなわちアルハとなったテナーが正式な大巫女となるのは初潮を迎えた十四歳の時からと考えられる。

このように幾重にも〈女〉のコードで読み解くことのできる巨大な子宮を思わせる闇の世界の中に、知と力と光の化身とも言うべき男ゲドが、失われたエレス・アクベの環の半分を持って侵入してくる。墓所の大宝庫に隠された秘宝を奪いに来たゲドは、男子禁制の聖なる迷宮に無理矢理押し入った強姦者と見なすこともできるが、ゲドに惹かれるテナーがゲドを自ら大宝庫へと導いた時、ゲドの行為は凌辱の意味合いをなくす。しかも、ゲドが奪いに来た宝、エレス・アクベの環のかけらは、もともと名無き者たちに属するものではなかった。奪いに来たのではなく、取り戻しに来たということで、ゲドには正当性が与えられる。ゲドが外の世界から持ち込んだ環と長いこと地下迷宮の奥深くに眠っていた環は、ついに結合して一つになる。それはまさに、子宮の中で精子と卵子が受精する生殖のイメージにつながる。永遠に同じ人間として生まれ変わる大巫女アルハには、ある種、性を拒否した単性生殖のクローンを連想させる不気味さがあるが、男女の協力によって一つに結びつけられた環の完成は、アルハの成り立ちの不自然さを解消する役割を果たしているようにも思われる。こうして、永遠に生まれ変わるべく定められた闇の巫女アルハは、自らの運命に逆らっ

て本来の少女テナーに戻り、初めて目にした男の手に導かれて、光に満ちた真の世界に改めて生まれ直すことになる。

The Tombs of Atuan に見られるユニークさ、複雑さの所以は、一つには、基本的には「英雄に救出される囚われの美女」という典型的なロマンスの枠組みを持ちながら、助け出された美女と英雄は結ばれることなく、最後の最後に boy-meets-girl のパターンが覆されてしまうという点であろう。ゲドは“Alone, no one wins freedom.” (p. 123)⁽³⁾ と言っておきながら、テナーと一緒にいて欲しいと頼まれると、“Where I go, I must go alone.” (p. 144) と言って、テナーの気持ちを拒絶するのである。テナーにとって、ゲドは生まれて初めて出会った異性だが、テナーがゲドに対して抱いている感情は明らかに恋と呼んでいいものであろう。それにもかかわらず、洞窟の中の濃厚な性的イメージとは対照的に、二人は実際にはキス一つ交わすことなく、きわめて禁欲的な旅を続ける。物語が定石通りに進まないフラストレーションは、テナー自身のゲドに対する殺意というショッキングな形で読者の前に呈示される。

もちろん、ゲドとテナーが結ばれるハッピーエンドであれば、テナーは英雄ゲドに勝ち取られた戦利品に過ぎない存在となってしまう、それはそれで、また問題なのだが、この作品が単独で完結するものでなく、シリーズものの一巻であるという側面から考えれば、この何とももの悲しい結末は、ストーリーの都合上、避けられないものなのだという見方もできるかもしれない。つまり、物語の主役であったかに見えたテナーは、結局のところ、脇役に過ぎず、数々の冒険の主人公である英雄ゲドにとって、アチュアンの墓所は単なる通過点の一つでしかなかったということだ。ゲドはこれから先も華々しい冒険を続けなければならない、テナーは置き去りにされ、物語の表舞台から追いやられてしまうのである。女とは、ほんの束の間、英雄の輝かしい生涯の一ページを彩るだけの、脆くはかない二義的な存在でしかないのだろうか？

しかしながら、*The Tombs of Atuan* で強調されているのは、決して女の弱さではない。それどころか、アチュアンの墓所に広がる〈名無き者たち〉の地下世界は、恐ろしく異様な力に満ちている。偉大な魔術師ゲドさえも、そこから独力で脱出することは不可能だった。砂漠の果てにあり、Godking の支配する地上の世界からはほとんど忘れ去られているが、紛れもなく、太古の昔より地中深く存在する巨大な力、それは取りも直さず、何世代もの間、顧みられず、抑圧され続けてきた名も無き女たちの持つ底知れぬパワーを象徴するものであろう。SF・ファンタジーの翻訳家である井辻朱美氏は、ファンタジーを演出する空間の一つとして「地下迷宮」を挙げ、「土の中はクマヤリスが冬眠する安全な暖かい巣穴であり、大地の母の胎内であるが、大地の母とはまた、すべてをおのれの貪欲な腹中にひきずりこもうとする、のみこむ母でもある。そこはまた死体が土にかえる場所であり、秘密の宝がうずめられる場所であり、いまわしい犯罪が隠される場所でもある」⁽⁴⁾と説明している。この説明は、そのまま、そっくりアチュアンの墓所にあてはまる。Le Guin はエッセー集 *The Language of the Night* (1979, 1989) の中で、「〈女性原理〉は基本的に無秩序な^{アナーキー}

ものだ」と言っているが⁽⁵⁾、まさに女性原理を象徴するアチュアンの地下世界に渦巻いているのは、否定しようもなく存在しているのだが、方向性の定まらない、野蛮で盲目的で非論理的な力なのである。

Tehanu の中で、テナーに女とは何かと問われて、まじない女 witch であるモスはこう答えている。

‘... Who knows where a woman begins and ends? Listen, mistress, I have roots, I have roots deeper than this island. Deeper than the sea, older than the raising of the lands. I go back into the dark.’... ‘I go back into the dark! Before the moon I was. No one knows, no one knows, no one can say what I am, what a woman is, a woman of power, a woman’s power, deeper than the roots of trees, deeper than the roots of islands, older than the Making, older than the moon. Who dares ask questions of the dark? Who’ll ask the dark its name?’ (p. 53)⁽⁶⁾

女とは何者なのか、女の力とはどんなものなのか、誰にも答えられるわけがない、誰が闇に向かってその名を尋ねたりするだろうと逆にモスに問い返され、かつて闇の世界の住人であり、今や二人の子供を成人させた四十代の成熟した女となったテナーは ‘I will’ と答える。テナーのこの言葉は、取りも直さず、前三作から二十年近い歳月を経て、女の視点を前面に押し出した *Tehanu* を上梓した作者 Le Guin 自身の決意表明に他ならないが、*The Tombs of Atuan* における十五歳のテナーには、まだ、闇に名を尋ねてみようとするだけの器量は備わっていない。ゲドの力を借りて、すべてを呑み込み引きずり込む圧倒的な力から逃げ出す勇気を奮い起こすだけで精一杯なのだ。

The Tombs of Atuan のテナーは、何百年も前から続けられ、半ば形骸化した儀式によって選ばれた墓所の大巫女であり、喰らわれた者として、意志と個性を奪われて、〈名無き者たち〉に仕える闇の〈器〉である。暗黒の世界を自由に動き回ることのできるテナーは、救出を待つ囚われの姫君であると同時に、迷宮に潜んで、英雄の行く手を阻む怪物ミノタウロスの役割をも果たしている。この相反する二重のイメージは、テナー自身の無意識の中にある光への志向と闇への志向を暗示するものと考えることができる。

闇に属するアルハとしてのテナーは、因襲によって定められた制度に則って権威を与えられ、墓所の権力構造の頂点に立って、相応の優越意識を持っている。だが、墓所における大巫女の権限は既に本来の意味を失い、今では、Godking によって作り上げられた枠組みの中での虚像に過ぎなくなっている。テナーはこの不条理に薄々気づいているものの、とにかく、力ある男によって築かれた制度を受け入れてさえいれば、それなりの身分は保障されているという状況にある。Le Guin

は“Earthsea Revisioned”の中で、「テナーは自由な行為主体ではない」⁽⁷⁾と語っているが、実の母に産み落とされ、先代の大巫女が死んだ日に生まれたという理由だけで新しい大巫女に選ばれ、名無き者たちに喰らわれ、闇の器として仕立て上げられたテナーのその徹底した受動性こそが、物語の重要なキーポイントになっていることを忘れてはならない。つまり、テナーの行動原理は、世の中のどこにでもいる女たちと同様、好むと好まざるにかかわらず、与えられた運命を甘んじて受け入れるということであった。

ゲドとの出会いがなければ、死ぬまで暗黒の世界にとどまっていたはずのテナーだが、一方で、ゲドがテナーの中に見出した光は、幼い頃からテナーの中に存在し、密かに育まれていたものである。つまり、名無き者たちに喰らわれた後も、テナーは空っぽにはなっていなかったということになる。そのことに関しては、物語のプロローグから第二章までの間に、Le Guin が正式な大巫女となる前の幼いテナーの姿を丁寧に描いていることに注目したい。テナーにはかすかながら、母に抱かれた記憶があり、次第に薄れゆく記憶を惜しむかのように、自分がどんなふうにもここへ連れてこられたのか話して聞かせるように付き人のマナンにせがむ。何世代も続くアルハという称号を受け継ぐ以前の、テナーだけの固有の財産とも言うべき幼時の記憶へのこだわりは、他のアルハたちとは違うテナー自身のアイデンティティーの確認という意味で、きわめて重要である。苦しい生活の中、女の子など厄介払いしてしまいたいと考える親も少なくない状況にあって、テナーの母は、赤ん坊が天然痘に罹ったと偽ってまで使用者を追い返そうとしたとマナンは語る。このささやかなエピソードは、貧しい暮らしをする弱者であるテナーの母親が、我が子を手放すまいとして、権威あるしきたりに対して、かなり大胆とも思える抵抗に出たことを示すものである。巫女たちの怒りを恐れて、そんな母を殴った父親の姿も同時に描かれていることで、不条理な運命をただ黙って受け入れることが必ずしも女に特有の属性ではないことがさりげなく示されている。

そういう母親の愛情から引き離された後も、テナーが人間らしさを失わなかったのは、付き人マナンの盲目的とも言える愛情のためであった。Tehanuの中で、テナーは宦官であるマナンを「母親に最も近かった人」(One of them was the nearest to a mother I had there. p. 54)と説明しているが、The Tombs of Atuanでは、テナーはマナンのことを「ただの忠実な老いた鈴付き去勢羊」(Manan was nothing, a faithful old bellwether; p. 31)ぐらいにしか認識していなかった。テナーのマナンに対するこの侮りは、アチュアンの大巫女たちの差別意識を反映するものであり、男であって男でない、だからこそ女だけの聖域に入ることを許されていたマナンは、肉体的にも精神的にも取るに足りないアウトサイダーとして、権力構造の枠の外にいる人物なのである。そのような特殊な立場にいて、マナンはテナーを墓所の大巫女アルハとしてでなく、見たままの小さな娘として無心に可愛がるのが可能になった。

マナンは、喰らわれて本来の名前を失い、アルハとなったテナーを“honeycomb”, “little one”などの愛称で呼ぶことを好む。それは、個性を取り去られ、空っぽになったはずのアルハに、新た

に個性を付与する行為と考えることができる。マナンはこうして、テナーの中にかすかに消え残る炎と人間性を守り続けていたことになる。しかしながら、マナンもまた、所詮は闇の世界に属する人間であり、閉鎖された空間の中でテナーが安逸な暮らしを続けられるよう、可愛いテナーを守ろうとはするものの、その暗黒の聖域を否定し、そこから出ていくことなど及びもつかない。テナーが迷宮で死にかけたゲドを助けようとして、自分のマントを脱ぎ、その上にゲドを寝かせるようマナンに命じた時、マナンは“Your garment will be defiled. The Priestess’s garment. He is an unbeliever, a man.” (p. 83) と言って、畏れおののく。マナンの目から見れば、それは神聖なる処女性への冒瀆であり、許されざる犯罪行為なのである。ゲドに惹かれるテナーを案じるマナンは、やはり母親と言うよりは、愛娘を男に奪われ、苦悩する父親の姿に最も近いのではないだろうか。テナーを深い愛情で包み込み、無垢な処女のまますろろうとした老いたマナンは、最後には迷宮の怪物となって、英雄にして貴い宝の強奪者であるゲドに襲いかかり、そして呆気なく死んでいく。テナーは、母なる迷宮という胎内から離れ、半ば父でもあり、母でもあったマナンの庇護を振り切り、その命を犠牲にして、外の世界に踏み出さなければならなかったのである。

ゲドと会う以前、テナーはアチュアンの墓所しか知らず、その聖地こそが全世界だった。アルハとして、名無き者たちの代理人とも言うべき立場にあるテナーには、自分のいるこの場所こそ、この世のすべてを産み出した聖地であるという絶対的な自負がある。外の世界に憧れるペンセとは対照的に、ここ以外の世界に好奇心を持つことなど、言わば、大巫女としてのプライドが許さない。無意識のうちに自ら抑え込んだ外界への好奇心は、勢い、自分の治めるべき領土である地下迷宮の探索へと向かうことになる。そして、地下迷宮をある程度、熟知したつもりになった頃、テナーは侵入者ゲドの作り出した魔法の光で、闇の中に隠されていた、あまりにも思いがけない美を目撃してしまう。何千年も昔からそこにあったのに、誰の目にも触れられることのなかった、想像を絶する洞窟の美しさ——。最初から間違いなく存在していたものが、闇に呑み込まれ、存在しないも同然になっているという状態はきわめて象徴的である。ゲドの光に照らされて露わになった美に触れた瞬間から、テナーは死より生に、闇より光に惹きつけられるようになる。そして“... instead of terror at the sacrilege and rage against the thief, she thought only how strange it was, how strange...” (p. 69) という記述から察せられるように、その感動をもたらしたゲドに、ほとんど最初から、本当の意味での憎しみなど感じてはいないのだ。洞窟に隠されていた美は、テナーの中に眠っていた人間としての魂と真の名前に通じるものであり、そこからテナーは新たな自己発見へと向かってゆくことになる。

ゲドが図らずも最初にテナーに及ぼした影響は、抑圧された好奇心の解放だった。虚像の権威と引き替えに無知を強いられていたテナーは、ゲドによって目を開かされ、無意識のうちに自分がどれ程、光と生と美に渴望していたかを思い知らされるのである。禁じられていた扉が開かれた途端、

闇の世界での単調な毎日はたちまち色褪せたものになり、名無き者たちの代理人アルハとしてのテナーの自負は揺らぎ出してしまふ。アルハとしてのアイデンティティー崩壊の危機は、テナー個人のアイデンティティー回帰へとつながってゆく。テナーは自分の仕える〈名無き者たち〉が神聖を冒瀆した侵入者を何故すぐに殺してしまわないのか不満に思う一方で、ゲドが〈名無き者たち〉と渡り合うだけの力を示してくれることを無意識のうちに期待している。自らのホームグラウンドである暗黒の世界の中で、迷宮の道筋を記憶しているが故に優位な立場にあるテナーは、ゲドを闇の迷宮に閉じ込め、袋の鼠をなぶるように弄びながら、まるでゲームを仕掛けるように生き延びるためのヒントを与え続け、ゲドの力を試そうとする。闇の中で死にかけているゲドを見て、魔術が万能でないことを知り、ゲドの無力さを嘲りつつも、テナーは名無き者の名を知っているというゲドに畏怖を感じる。知らず知らずのうちに、ゲドの持つ知識と精神力、底知れぬ闇の恐怖に立ち向かう勇気に魅了されてしまふ。

Godking の巫女コシルは力だけを神聖視し (She had nothing sacred but power. p. 60)、信仰心などかけらも持ち合わせていないにもかかわらず、カルガドの支配者である皇帝を生き神として受け入れているが、そういうコシルの権力志向を冷静に分析するだけの能力を備えたテナーもまた、もともと力というものに対して意識的であったと言える。アチュアン の墓所という女だけの世界の中で最高の権力を握るために、コシルは便宜的に遠い世界に住む男の力を利用し、男の論理を持ち込もうとした。言わば、〈鳥無き里の蝙蝠〉として、力で権威を奪い、墓所に君臨しようとしているのである。コシルの崇拜する力が人を支配し押さえつける圧力であるのに対して、テナーに感動を与えたゲドの力は物事の本質を見極め、その名を知ることで得られる知の力である。Godking の力が他を征服し支配して、弱者に隷属を強いるものであるとすれば、また、名無き者たちの力が破壊的で狂気に満ち、闇と死に向かうものであるとすれば、魔術師ゲドの力は、まったく逆のベクトルを持つもの——光と生に向かい、調和的、創造的なものだと言えるだろう。ゲドによって目を開かされ、真の力の本質に気づいたテナーは、旧来の男性的制度を受け入れることで獲得していた虚像の〈力〉を捨て、外の世界に踏み出すことを決意することができたのである。

後の *Tehanu* の中では、性を否定することで獲得される魔術師の力も、結局、女であるテナーが目指すべきものではなかったことが明らかにされる。四十歳になったテナーは、過去の自分を振り返りながら、次のように言う。

‘Arha was taught that to be powerful she must sacrifice. Sacrifice herself and others. A bargain: give, and so get. And I cannot say that that’s untrue. But my soul can’t live in that narrow place — this for that, tooth for tooth, death for life . . . There is a freedom beyond that. Beyond payment, retribution, redemption — beyond all bargains and the balances, there is freedom.’ (p. 176)

テナーのこの言葉は、Le Guin が“The Fisher-woman’s Daughter”と題するエッセーの中で、女性が作家になろうとすれば、本を書くか子供を産むか、どちらかの選択を迫られるとする考え方がいかに間違っただけのものであるかについて述べていることを思い出させる。

A sacrifice, not of somebody else but of oneself, is demanded of women artists (while the Gauguin Pose demands of men artists only that they sacrifice others). I am proposing that this ban on a woman artist’s full sexuality is harmful not only to the woman but to the art.⁽⁸⁾

Le Guin は、力を得るために、あるいは芸術家となるために、女であることを否定するのはナンセンスだと考える。だが、いわゆる女の仕事もこなすゲドにさえ、「力は男に属するものだ」(… power belongs to men. …’ p. 178) と言わせ、「力ある女がいるとすれば、それは、男が自分の力を女に与えているに過ぎない」(‘I mean, men give her power. They let her use their power. But it isn’t hers, is it? It isn’t because she’s a woman that she’s powerful, but despite it.’ p. 179) と言わせるのである。Le Guin は、世間ではこの種の主張が常識としてまかり通っていることを承知しているし、*The Tombs of Atuan* を書いた頃は、自らその「常識」に従って執筆している部分もあっただろう。アチュアンの墓所におけるテナーとコシルの権力闘争を見る限り、ゲドの主張は確かに正しいように思われる。しかしながら、強くなるために男の模倣をしても、所詮、女は不完全な男にしかなれない。完全な女であって、しかも力と責任能力を備えた存在となるにはどうすればいいか、Le Guin は *Tehanu* の中で、その方向性を模索し、従来とは異なる〈力〉の新しい定義付けを試みようとしている。

神聖なる巫女アルハに選ばれ、特別な存在として、旧来の制度を受け入れることで得られるある種の力を持って生きてきたテナーは、十五歳で自らの無知と無力を思い知らされ、闇の世界を後にする。自分の無力さを悟ったテナーが歩き出すことができたのは、強い力を持ったゲドが支えてくれたおかげだったことは否定できない。名無き者たちの圧力から逃れ、ゲドの力を無邪気に賞賛し、すっかり安心して、幸せな気分浸っているテナーは、ゲドに甘え、頼り切っている子供のように見える。力弱い者が自分の身を守るために強い者に依存し、従属したがる傾向は、人間の一種の本能かも知れない。しかも女は、社会から歴史的にそういう生き方を奨励されてきた。たとえ強制されたものであったとしても、他者に決められた道を歩いていくことは容易い。結果がどう出ようと、それは自分の責任ではないからだ。そんな生き方に慣れてきたテナーが本当の意味で成長するためには、やはり、どうしてもゲドの庇護から切り離されなければならないのである。

巨大な子宮をイメージさせる男のいない世界からテナーを引き離し、新たな誕生を促したにもかかわらず、実は、自らも性を拒否することで力を得た魔術師であり、女のいない世界で「男らし

さ」の象徴としての役割を担ってきたゲドの立場は、非常に微妙なものと言える。アチュアンの墓所を脱した後、これからテナーをどう扱えばいいのか、ゲド自身、戸惑っているように見える。ゲドはテナーのためにハブナーでの華やかな生活を次のように描いてみせる。

‘Havnor is a beautiful city,’ he said. ‘And you bring it the ring, the sign of peace, the lost treasure. They’ll welcome you in Havnor as a princess. They’ll do you honour for the great gift you bring them, and bid you welcome, and make you welcome. They are a noble and generous people in that city. They’ll call you the White Lady because of your fair skin, and they’ll love you the more because of you are so young. And you are beautiful. You’ll have a hundred dresses like that one I showed you by illusion, but real ones. You’ll meet with praise, and gratitude, and love. You who have known nothing but solitude and envy and the dark.’ (p. 140)

ハブナーは本来、ゲドやテナーとは縁遠いはずの俗世間であるにもかかわらず、テナーがその街に住む人々から王女のような歓待を受け、若く美しいからこそ、いっそう愛されることになるだろうと語るゲドの言葉には、いかにも旧式で俗っぽい価値観が反映されているように思われる。それもまた、ゲドの戸惑いを示す一つの証であろう。確かにテナーはゲドの描く通りの華やかな人生を送ることもできたはずだ。だが、悪の器としての大巫女という立場を捨ててきたテナーは、再び、実像とは一致しない新たな権威と名誉の器としての姫君的存在になることなどできるわけもなかった。テナーは今の自分に必要なのは、等身大の自分を見つめ直すことだとわかっていたのである。

本人の意志とは無関係に選ばれた〈悪の器〉に過ぎなかったという一種の大義名分に守られて、テナーはどんな罪を犯しても、ある意味で無垢な存在であることができた。暗闇に閉じ込められ、大巫女としての権威と引き替えに無知を強いられていたテナーは、自らの無知に気づかぬまま、権力を握る男たちにとって都合のいい存在であり続ける世の多くの女たちの生き方を映し出しているのかもしれない。母の胎内で微睡むようなある種の居心地のよさを感じさせる闇の世界を出ていくことは、無垢であり、無知であり、責任をとらなくてよかった少女期との訣別を意味する。

Le Guin は、英語において、人の誕生が受け身で語られるのはおかしいと言っているが⁽⁹⁾、常に受け身の人生を送ってきたテナーは、壊れた環の結合が象徴するように、自らの新たな誕生に自ら関わり、言わば、自分で自分を産み出すような体験をする。テナーの協力がなければ、ゲドも地下世界から脱出することができなかったとは言え、この時点で、ゲドとテナーは決して対等の関係ではない。生まれ直したテナーが、ゲドの助言に従って、ゲドの師であったオジオンのもとを訪ねる決心をするのは、少しでもゲドに追いつきたいと願う心理の現れと考えることもできる。ゲドとテナーが、ある種の典型的役割分担の中に自らをはめ込んでいることは、今後、二人が再会する可能

性が暗示された会話からも窺える。

‘... And if you ever need me again, call me. I will come. I would come from my grave if you called me, Tenar! But I cannot stay with you.’ (p. 144)

‘Will you come there, ever?’

‘When I can I will come.’ (p. 154)

そこにはなお、テナーが助けを必要とした時にゲドが駆けつけるという旧態依然の関係性がはっきりした前提として存在しているのである。だが、二人の再会はこれから二十五年の後、英雄としてのすべての冒険を終えたゲドが、力を使い果たし、燃え尽きて抜け殻のようになった状態で、テナーに癒されるために転がり込んでくるという形で実現することになる。*The Farthest Shore* が終わった時点では、我々はまだ、テナーがその二十五年をどのように過ごしてきたのか、まったく知らされていない。かろうじて、ゲドに助けを求めることなく、自分の人生を歩んでいるらしいと推測できるだけだ。*Tehanu* において、平凡な女として生きてきたテナーが再び読者の前に姿を現した時、我々は Le Guin がテナーに何を選ばせたかったのかを明確に知ることになる。英雄の物語における英雄否定、それは、*Tehanu* 以前に、既に虚像の権威の座を降りた *The Tombs of Atuan* のテナーの選択に始まっていたと言っていいたいだろう。

ゲドの力は借りたものの、心の葛藤を乗り越え、自らのアイデンティティーを取り戻し、聖なるアルハの地位を捨て、アチュアンの墓所という胎内から飛び出したテナーは、大巫女や王女のような権威の衣を着せられた特別の存在でなく、等身大の自分に戻り、硬直したお仕着せの価値観から解放され、真の自由の重さを噛みしめながら、自分の足で歩き出す。その足取りは危なげで、これから、どこまで行けるかわからない、だが、*The Tombs of Atuan* は、一人の女として、自分自身であることを受け入れたテナーの始まりの物語なのである。

注

- (1) 1992年8月、Ursula K. Le Guin がオックスフォード大学で開かれた Children's Literature New England の大会で行った講演 “Earthsea Revisioned” より。「『ゲド戦記』を “生きなおす”」清水真砂子訳『へるめす』第45号（東京：岩波書店、1993）。
- (2) At de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Publishing Company, 1974) アト・ド・フリース著『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹（東京：大修館書店、1984）、p. 644.
- (3) Ursula K. Le Guin, *The Tombs of Atuan* (London: Puffin Books, 1972)。以下、*The Tombs of Atuan* からの引用は、すべてこの版による。
- (4) 井辻朱美、『夢の仕掛け』（東京：NTT 出版、1994）、p. 262.
- (5) Ursula K. Le Guin, *The Language of the Night: Essays on Fantasy and Science Fiction* 山田和子他訳

- 『夜の言葉』（東京：岩波書店，1992），p. 145.
- (6) Ursula K. Le Guin, *Tehanu* (London: Puffin Books, 1992)。以下，*Tehanu* からの引用は，すべてこの版による。
- (7) 「『ゲド戦記』を“生きなおす”」，p. 147.
- (8) Ursula K. Le Guin, “The Fisherwoman’s Daughter” (1988) in *Dancing at the Edge of the World*, (New York: Grove Press, 1989), p. 225.
- (9) 「『ゲド戦記』を“生きなおす”」，p. 152.